

## 日本語研修コースにおける<文化>の扱い

大嶋 眞紀  
(留学生センター教授)

はじめに

国立大学法人は、大使館推薦国費の大学院入学前予備教育生に対し日本語研修コースを開講しているのが一般的だ。日本語能力がゼロまたはそれに近い留学生が主な対象で世界各地から来日する。彼らの多くはインターネットの恩恵やメールによる事前の情報提供により、ある程度、<日本>に関する知識を踏まえて来日していると推察してきたが、実態は以前とそれほど変わっていない。

彼らの多くは到着時には方向もよくわからず、特に地方都市では英語による表示も不十分であるため、行動も制限され、オリエンテーションと日本語クラスでようやく息を吹きかえし、その後は日本語能力の伸長とともにゆっくりと<日本>を学習するというプロセスを経る。しかし日本語研修コースは一学期間で修了し、その後は各研究室に配属となり、そのまま専門領域の研究のみの生活に突入することになる。その中で様々な問題に遭遇し、中にはそれらをクリアできずに無念の帰国をする留学生も少ないながら存在する。

そのような事態を事前に防ぐために、あるいは迫りくる問題をある程度予測し、対処できるようにするために、日本の社会や文化についてどのような教育を行ったらよいのか。行う必要はさしてないのか。あるいは彼らが日本語能力をある程度身につけるまで待ち、そのあとで「日本事情」的な授業を簡易な日本語で行うべきなのか。本稿では、筆者が担当する日本語研修コースの「異文化理解」という授業を紹介することにより、<日本>という異文化社会をどのように学習させたらよいかという問題を考察したいと考える。

この「異文化理解」は英語による授業で、受講者数は平成18年度前期で12名、そのうち9名が日本語研修生で、のこりの3名は非漢字圏初級レベルの短期留学生であり、16年度開講以来、人数は毎学期15名前後にとどまっている。他大学では短期留学生専用の英語によるコースを設けている場合が多いが、本校では英語コースがないため、便宜的に受講を認め、短期留学生には単位も認定している。ただし、日本語研修生と短期留学生では背景、目標、ニーズが異なるため、必ずしも最良のオファーとはいえないが、現在は同時受講させている。

## 1 一般的な状況

### 1-1 理論的な背景

「日本事情」の内容と方法については、様々な議論が提起されているが、その中で、本稿に關係する事項について若干言及しておきたい。1980年代までの情報提供型、1990年代のコミュニケーション重視型を経て、以後、学習者の主体的な「文化」認識とそれに基づく自己表現を重視する型などが「日本事情」の主要な流れとして指摘されている(川上, 2002, pp.127-129; 細川, 2003, pp.41-44)。筆者の限られた経験でも、学部生を対象とした「日本事情」のクラスで、彼らの発話が習得済みであるはずの上級レベルの日本語能力とは不一致な印象を与えるケースが少なくない。発話が自己の内面の思考や感情に密着していないという問題から、日本社会についての情報を外から一方的に与えるのではなく、学習者の内面を追う方向に「日本事情」の手法が移行しつつあることは十分了解できる。しかし一方で「日本事情」が何を教えるべきかという問題も依然として問われているのではないだろうか(小川 2002, pp.52-65)。本稿では「日本事情」を日本語習得といったん切り離したら、どのような側面が見えてくるかという角度からこの問題を考察したい。「日本事情」を受講する学部生とは質の異なる日本語研修生に、<日本>あるいは<文化>の何を教える必要があるのかを考察したいと思う。

### 1-2 ステレオタイプの問題

次に問題となるのは、<日本>あるいは<文化>の何を教えるべきかという問題設定そのものに含まれるステレオタイプの問題であろう。固定的な国家像や文化論は幻想であり、その功罪を勘案すると「罪」のほうが大きいという指摘は再三なされている。細川(2000, pp.21-22)は「外側からの文化論を知識情報としてのみ学習しようとする、文化理解が表層的にとどまるだけでなく、内側からの個人の自覚化・意識化に至りにくくなることはほぼ間違いない」として「文化」を社会集団の産物としてのみとり扱うことの弊害を指摘している。

しかし一方で留学生をとりまく社会環境に目をやると、至るところ「ステレオタイプ」だらけといっても過言ではない。国際化をめざす諸団体からのアンケートなどには、「日本のテレビはおもしろい?」「日本のお年寄りの印象は?」などといった無造作な質問項目が充満しており、また地域社会での交流行事などでもスピーチや懇談会などで繰り返されるのは類似のステレオタイプの再生産以外の何物でもない。留学生に<文化>を教える際、そのようなステレオタイプをどう認知し、どこまで容認し、さらに自分の力で有効に対処していくにはどうしたらよいかということも含めて教える必要があるのではないだろうか。

### 1-3 他大学の状況

他大学の日本語研修コースにおける「文化」の扱いを概観してみると以下のような傾向がうかがわれる。ただし参考としたのは2003年から2005年にかけての24国立大学法人留学生センターの紀要、自己評価報告書等であり、シラバスではないため、記述はあくまで概観にとどまる。

- A 日本語研修コースの時間割の中で、「文化」「日本事情」「異文化理解」などの科目を週1回以上、一学期を通じて規則的に開講している大学。
- B 日本語研修コースの時間割に上記科目の設定がないか、特別演習などという形で回数を限って開講したり、コース外のプロジェクトワークなどで「文化」を扱うなど不規則的に開講している大学。

上記A Bはほぼ半数ずつで、さらにAの中でも、明確な目的や意義、授業内容などの記述が得られたものもある。記載内容及びその特徴は以下の通りである。

#### [目的の記載例]

- ・ 文化面では、研究者としてのアイデンティティを保って他と交流するという現在及び将来の接触の質に鑑みて、大学を中心とする研究の場において円満な人間関係を構築するための知識と技能を提示する。(因 2005, p.37)
- ・ 日本文化体験あるいは地域社会との交流を目的とした日本事情教育は、来日直後の日本語研修生にとって異文化理解を深めるための手助けとなるのみならず、習得した日本語を教室外で使用することで日本語教育を補完できるという意味合いもある。(岡 2005, p.75)
- ・ 日本の生活に適応できるようにする。日本の文化・習慣など、日常生活で最低限必要なことを学ぶ。英語で行う場合もある。(熊井・中里 2004. p.73)

#### [内容の記載例]

- ・ 日本の大学についての講義・研究室訪問・日本人学生との会話など。
- ・ 日本文化体験型、地域交流型の学習項目に特化。市内見学・ 焼・ 町・ 高校・ 茶道華道など。
- ・ 日本及び当該地域に関する専門的な知識を英語で講義する。
- ・ 日本の芸術・言語学とは何か・現代ポップカルチャー・日本の経営・日本の教育(使用言語は英語)
- ・ 日本の社会と文化に関する講義。工場見学・中学校訪問・伝統文化。
- ・ 日本文化や日本の暮らしに関するビデオ視聴・寺院見学・茶道や着物体験。はじめは英語で次第に日本語使用に切り替える。
- ・ 国際交流学生ボランティアにより、交流を通じて社会や日本語を学ぶ。

特徴としては、「日本文化を体験する、概観する、地域見学」などが主流であり、使用言語や講義主体が必ずしも明確ではないものも多い。これは日本語研修コース生の日本語能力がゼロに近いところからスタートしているため、日本語だけでは対処できず、英語混じりにするか、体験主導型にするなどして、試行錯誤を繰り返しているためではないかと思われる。

ここで考えなければいけないのは、体験型の授業や、日本語研修生の勉学には必ずしも直結しない伝統文化などの見学や実習を大学での〈文化〉の授業として設定する必然性、有効性などであろう。昨今では地域団体による国際交流行事も多く、そうした体験型の学習は各種提案されており、日本語研修生が参加できる機会も多い。本稿では週一回、大学で行う通常の授業としてどのような内容が可能であり、有効なのかということを改めて追求したい。

## 2 授業内容の紹介

本校では「異文化適応」を含む「異文化理解」を主たる目標とした英語による授業メニューを用意

している。その理由は、日本語学習が一定の成果をあげるまでも異文化環境での生活は始まっており、様々な問題にぶつかるが、個別指導やカウンセリングなども折りにふれて実施されているものの、問題発生以前に事前の異文化学習を行うことも予防的効果があるのではないのだろうかという考えに基づいている。この考えの有効性を客観的に示すためには、長期に渡る比較調査が必要だが、現段階では試行状況を示すにとどめる。

以下に掲げるのはその授業メニューの例である。各ユニットは週1回90分の授業を1～2週で消化する。これらの講義内容は、到着間もない日本語研修生の体験に即し、最低限必要だと思われる領域を選び、過去数年の試行錯誤と学習者の反応・評価を反映させた結果であるが、その他にもいくつか試行錯誤中の領域があり、それらについてはまとめて後述する。「文化」に関わる広大な領域の中からあえて15週でカバーできる内容を選ぶというとき、絶対的な必然性は想定しにくい、一つの授業実施例として提示するものである。

表1「異文化理解」の概略

No	学習者の体験	トピック	内容
Unit 1	到着・オリエンテーション	環境を知る	キャンパス内を把握する。 キャンパス外を把握する。 居住地の地理と歴史の概観を知る。
Unit 2	日本語クラス開始	日本語学習方法	日本語の勉強方法をふりかえる。 日本語クラスのルールを考える。 日本語の特徴を知る。
Unit 3	ホームステイ体験等	マナーと習慣	日本人の挨拶行動を知る。 衣食住などの生活習慣を知る。 贈答や訪問のマナーを考える。
Unit 4	文化の違いの認識	カルチャーショック	目に見える文化・目に見えない文化体験をふりかえる。 カルチャーショック理論を知る。 問題解決方法を学ぶ。
Unit 5	研究室への通学	研究室の文化	研究室でのコミュニケーションを考える。 研究室内のルールを知る。 人間関係論の基礎を学ぶ。 対人コミュニケーション戦略(注文・苦情・断り)を考える。
Unit 6	学校訪問・地域交流	文化の発信	文化発信の手法を分析する。 発信のプランを作成する。 日本語パワーポイントを制作する。 発表の練習をする。
Unit 7	まとめ	「留学」の再確認	留学の過程をふりかえる。 「薩摩藩英国留学生」など歴史上の留学生について学ぶ。

			留学の意味を再確認する。
--	--	--	--------------

### 3 各ユニットの必要性及び授業方法

#### 3-1 環境を知る

本校でもオリエンテーション、キャンパス・ツアーなど様々な企画を実施しているが、それでもなお居住地域についての地理的、歴史的把握は不十分である。(根川 2006, p.27)「今は何という時代か」「大学から半径5キロ以内の地理、施設を明らかにせよ」「サムライの生きた時代は今からどのぐらい前か」などという大まかな質問にも答えられない学生が大半といい。自己をとりまく環境についての時間的・空間的認識が、まわりの教員や日本人学生、地域住民と根本的に異なるというのは、具体的なトラブルに直接発展しないにしろ、周囲の人間と話題を共有できないという難点がある。本ユニットを第一週に行う理由は一日も早く、居住環境に慣れることを主眼とするためである。

他大学でも地域を学ぶことの重要性は強調されており、本ユニットの発想と基本的には同じだが、他大学では体験学習を実施しているのに比し、本校では1～2コマの授業として扱っている点異なる。授業できっかけを与え、あとは本人の好奇心と行動力に任せるというやり方だ。

方法としては地図や年表を作らせる、休日を利用して特定の地域や施設を訪問するタスクを課す、日本人学生や地域住民へ英語により簡単な質問をするなどの活動を取り入れ、授業で結果を話し合ったり、集約して図などを作成させたりする。活動はすべて英語で行われるため、地名・人名などを漢字で知らないという難点はあるが、市内の移動や、西郷隆盛などの話題への対応など、基本的な認識をある程度ふまえることにより、日本人学生や地域住民とのつきあいが良好に進む気配はうかがわれる。

#### 3-2 日本語学習方法

学習者は研修コースで日本語学習を始めるが、早い時期に日本語学習のある程度の展望が得られるようにするのも有用であると考えた。特に将来、大学院博士課程までの進学をめざすこのグループの学習者は本国ではすでに大学の研究者で、年齢も三十を越えている場合もあり、日本語学習の意義を内心、認めていない場合もある。また講座によっては、日本語など必要ないと指導する教員もあり、動機づけを低めている点は否めない。日本語学習を必ずしも強制する必要はないが、日本語学習が日本での生活にどのような意味をもつか、また日本語習得の理論的側面、さらには日本語の面白さなども講義をすることにより、知的な意欲をもつ学習者の動機づけを強化するのに役立つ。また、プライドの高い、時に語学の習得に不慣れな学習者に、日本語クラスでのルールや、各種タスクなどの意味を説明することも、日本語クラスの運営に役立つ側面があるため、この講義を設けている。

英語であってもなるべく双方向的な授業を心がけているが、本トピックの場合は、テキストの勉強方法の振り返り、語学の習得には何が重要かなどについての議論、先輩留学生への日本語学習についての簡単なインタビューなどを実施している。

#### 3-3 マナーと習慣

日本での基本的な生活習慣を紹介する。あいさつ行動、日常生活の具体的な場面での習慣、たとえば、玄関からどう入るか、和室の作り、食事の作法、贈答の習慣などといった項目を含み、ともしれば、ステレオタイプの押し付けともなりかねないが、留学生と関わる場面に限定して導入する必

要性は否定できない。この頃から留学生は指導教員の家庭に招待されたり、ホームステイを体験したりすることなどもあるためだ。必要最低限のあいさつ、マナーなどの紹介が、日本の文化について考えるきっかけとなることもある。

たとえば、玄関先で自分の靴をそろえるのはなぜか、客が床の間を背景として座るのはなぜか、食事作法など、当事者の心理や他文化との比較など、共有できる話題も多々ある。また留学生は日本に来たら贈り物をあげなければいけないという強迫観念を持っている場合もあり、そのような問題についても授業で一度は議論しておくことも無駄ではない。

#### 3-4 カルチャーショック

来日して約1か月がたち、自分の生活圏や生活習慣が確立した頃にカルチャーショックについての講義を行う。カルチャーとは何か、という定義の問題から始まり、文化の包含する広い範囲を認識させた上で、カルチャーショックの異文化適応曲線や、カルチャーショックの諸症状などについて講義を行う(名嶋2006, pp.41-49)。また、実際のカルチャーショックの例を、周辺の留学生から聞き取ってくるなどのタスクを課し、その解決の過程などについて議論をする。最後にカルチャーショックを克服するための様々な方法についても議論する。このような授業をいつ行うか、タイミングも重要だ。学生が環境にある程度落ち着き、旅行者気分から抜け、そろそろ身近な日常を母国での日常と比べはじめ、多少の落ち込みを感じ始める時期にこの講義を行うと、カルチャーショックの諸相を理解し、自分の体験をある程度、客観視するのに役立つ。またコースを修了して年月を経た留学生に「落ち込むのは自分だけではない」と考えることができたと評され、一応有効であったと認識している。

#### 3-5 研究室の文化

大使館推薦の研修留学生が最終的な学位取得という目標を達成するための重要な項目であり、当初の日本語研修期間中、あるいは日本語を受講しない場合でも、一度は学習しておいたほうがいいのではないかと考え、取り入れた。昨今では大学院等への直接受け入れが進み、英語環境の中で何年も過ごす学生も増えているが、彼らにもこのユニットは必要不可欠である。

各研修生が講座や研究室の中でどのように受け入れられるかは千差万別であるが、受け入れサイドにも様々な問題点がある(林2006, pp.58-72)。当初のお客様扱い、英語を話すということから生じる英語優先の雰囲気、それでいて肝心なことは英語では案外伝わらないなどというコミュニケーション上の問題、研修生自身の母国での立場から来るプライド、方法論と、指導教員のプライド、方法論との衝突などあげればきりが無いが、様々な行き違いから学位取得が果たせないケースもあり、人間関係について自覚を促す意味でもこの項目は重要である。もちろん、トラブルが極端な場合は、制度的な解決が必要なことは言うまでもない。

方法としては、まず、研究室内で研究、就労、学習している人間のリストを作成してもらい、だれが何を担当しているか、人々の関係はどうか、どういう問題が生じたときに、だれに相談すればいいかをなどを一通り概観させる。研究室の機材についても、価格や利用の可否などの確認のタスクを課す。すでに帰国した学生の事例をケーススタディとして扱う場合もあるが、プライバシーへの配慮が重要である。さらに、日本人学生との友だち作り、日本人学生の英語使用の問題、コンパ等のつきあいなどについても方法のみならず、本質的な問題まで踏み込んだ議論を行う。

次に人間関係論の基礎的な文献(Beebe 1996, pp.58-72)を示し、関係作りや終焉の仕方、対人関係の基本的な特徴など、一般的な認識を深めさせる。最後は、留学生の宿舎での苦情の言い

方や、事務官や店の人などへの注文の仕方、交渉の仕方、飲酒などへの対処方法などについても議論をする。日本語ではまだ何も対応できなくても、日本社会での物事の処理がある程度、独力で円滑に行えるようにいわば下準備をすることが将来的に役に立つと考える。しかしながら、各国の留学生の使用する英語が互いに通じていない場合もあり、またコミュニケーションのロールプレイはこの段階では英語で行うため、日本語での伝達にいずれ効果があるのかどうかは不明である。

また研究室の様々な暗黙のルールについて、各自が調査し、明確にするタスクを課すのも、留学生と研究室双方の自覚を促すという意味で有効である。例えば(内藤 2006, pp.73-112)で指摘されているように、研究室には何時までいるべきか、また研究室とは大学院生にとってどのような居場所であるべきかなどという問題は、大学院での研究生生活の根源に関わる問題であり、今後の課題としたい。

### 3-6 文化の発信

研修コースは修了時にポスターセッションを実施している。15週間の初級集中授業の成果を発表するため、簡易な日本語による自国の紹介、専門分野の紹介などを日本語パワーポイントでポスター制作する。発表前の2週間、制作に時間をかけ、またプレゼンテーションの仕方についても、身振りや目線など非言語的な面での指導も受ける。本講義はそれ以前に、過去のポスター分析、文化発信の手法、自身の発表計画などについて試案を作成、相互に議論し、パワーポイントの実習なども受けさせる。このような準備過程がセッション当日、百名を越える見学者を迎えるに当たり、大変有用であり、また研修生はその後の学校訪問などの地域交流活動の際も、作成したポスターを改善し、文化の発信についてきわめて意識的になるなどの効果が認められる。

### 3-7 「留学」の再確認

日本語研修コースを終え、これから長い研究生生活に入る研修生に対し、この最後のユニットで改めて留学の意味を再確認させたいと考えている。三ヶ月の滞在経験ののち、再度到着時の驚き、その後のカルチャーショック体験とその克服を振り返る話し合いをする。また母国での生活との連続性、非連続性などを生活の各領域でチェックする作業を行う。学業、健康、経済、友人・家族関係、趣味などの領域、住居や食習慣、将来の展望などを自己チェックするシートを用意している。さらには価値観をめぐる討論、文化の媒介者として必要な能力についての自己チェックなども行い、最後に「薩摩藩英国留学生」を画像等で紹介する。150年前の日本人留学生が欧米から学んだことは何だったのか、そして現代の留学生は現代日本から何を学ぶことができるのかなどという問いかけを行い、「留学」の意味について再確認をし、自己目標の明確化、今後の様々な困難への心構えを形成する。

### 3-8 その他の領域

上記のほかに以下の三つのユニットを用意しているが、内容的には今後改善が必要であると考えている。

#### 3-8-1 伝統と宗教

本ユニットはステレオタイプの問題がつきまとうが、季節に関わる伝統的な行事や宗教的行動を留学生の目線が届く範囲内で紹介しつつ、日本人の宗教性や伝統観について留学生が少なからず抱く疑問にどう向き合うかが最大のポイントとなる。方法としては、年末年始や祭りなどの際、留学生自身が足を運び、じかに見聞する、あるいは研究室の友人や教員への簡単なインタビューを通じて、

日本文化を紹介する一般的な英文案内書の記述と実態がどう離反しているかなどという議論も行い、日本人の行動や思考に認められる多様性を認識してもらおう。

本ユニットを今後とも継続したいと考える理由は、最近ある留学生が研究室の飲み会で、日本人学生にだまされてアルコールを飲んだ事例があるためだ。宗教的な制限について昨今ではキャンパス内で一定の理解が進んだと考えていたが、このようなケースが続く限り、宗教に関するユニットは今後必要だと考えている。

### 3-8-2 社会構造の分析

ステレオタイプに直結する危険領域ではあるが、社会構造を分析する概念としての「タテ社会」という用語を紹介したいと考えている。元はインドと日本の社会構造を比較分析する際に用いられたものであることや、「菊と刀」以来の日本文化論の変遷などを紹介すると、「タテ社会」などという概念を自国では考えたこともない理系の研修生達は、このような人文科学の分析概念そのものに興味を示し、どのような手法で社会のタテ構造やヨコ構造を立証できるかという点に興味を示す。ステレオタイプを間接的に強化する側面も否定はできず、方法上の精査が必要だと考えている。サブテーマとして、ステレオタイプそのものに関する学習を行い、無意識的なステレオタイプに陥る危険を未然に防ぐなどの手法を併用する必要がある。

### 3-8-3 文化の比較

前ユニットに引き続き、ステレオタイプに陥りがちな「文化の比較」をテーマとする。文化をどう比較することができるかというテーマであるが、一つのサンプルとして、(Goodman 1994, pp.127-147)で紹介されている教育方法の比較研究を追体験する手法などが考えられるが、データがすでに古くなっていることや、元の調査の質問用紙の内容が、例えば教師中心主義対学習者中心主義など、どうしても単純化を免れないなど、問題も少なくない。文化を安易に比較することを避けるために用意したユニットではあるが、内容、方法とも改善が必要である。

## 4 学習者による評価と問題点

ユニット1～7は受講生による教材評価で、平均4以上(5段階評価)の評価を受けており、必要性や有用性も認識されているが、その他の領域の三つのユニットはそれほど評価が安定しておらず、必要不可欠な領域なのかどうかは不確定である。また授業では討論に時間をかけるため、受講生の積極的な発言が多いが、英語を母語としない者同士の討論には誤解、深読みなど行き違いも多く、討論の詰めが必ずしもなされずに終わる場合もある。また授業の重点を「必要性」にのみ置くと、ゆとりがなくなるため、季節の移り変わりを紹介したり、視聴覚教材の活用を望む声に応じて、市販の教材、ビデオなどを利用したりするが、それらは無意識的ステレオタイプを多く含むため、とり扱いには注意が必要である。全体としては16年度開講以来、徐々にクラス運営が安定し、日本の環境や人間、文化について学ぶことができるという評価を得るようになってきている。

### まとめ

日本語研修コース生に〈文化〉を教える意義は大きい。その際、〈文化〉とは伝統行事などの「楽しみ」のためのみではなく、目前のサバイバルに不可欠な文化的側面について教授するべきではないだろうか。身の回りの環境を把握する、日本語学習について積極的に取り組む姿勢を作る、最低限のマナーと習慣を心得る、カルチャーショックを乗り越える、研究室の人間関係を知る、自国



の文化をどう発信するかを考える、長期留学についての心構えを作る、いずれも必要不可欠な領域である。日本語研修コースでは日本語能力の基礎作りをするが、＜日本＞把握の基礎作りもまた必要である。もちろんその際、様々な手法を用いることで文化を学ぶ楽しさや、文化の背景に思索を広げる面白さを伝えることも重要だ。これらの内容を短時間で行うために、日本語習得を待たずに英語で行うことを本稿では提案した。文化を他言語で扱うことの限界や是非は今後の検討事項である。

## 文献

- 岡益巳(2005). 文化体験・交流型の日本事情教育『岡山大学留学生センター紀要』第12号 pp.75-90.
- 小川早百合(2002). 文化“知識”としての“日本事情”再考「21世紀の『日本事情』」編集委員会『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ 4』くろしお出版 pp.52-65.
- 川上郁雄(2002) 言語と文化の教育そして日本事情「21世紀の『日本事情』」編集委員会『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ 4』くろしお出版 pp.126-132.
- 熊井浩子・中里弘子(2004). 日本語研修コース5期・6期(静岡キャンパス)『静岡大学留学センター紀要』第3号 pp.71-76.
- 因京子(2005). 日本語研修コース実践報告『九州大学留学生センター紀要』第14号 pp37-45.
- 内藤(都築)裕美(2006). 規範意識から見た理工系研究室 三牧陽子(編)『大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号 14580329)pp.73-112.
- 名嶋義直(2006). 異文化理解リテラシー育成に向けて 日本事情授業における取り組みから『日本語教育』129号 pp.41-49.
- 根川幸男(2006). 海外における「日本文化」科目のデザインと可能性 ブラジリア大学「日本文化」科目のめざすもの 『リテラシーズ2』くろしお出版 pp.19-33.
- 林洋子(2006). 理工系研究室はどのようなコミュニティか 三牧陽子(編)『大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号 14580329)pp.58-72.
- 細川英雄(2000). 崩壊する「日本事情」 ことばと文化の統合をめざして 「21世紀の『日本事情』」編集委員会『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ 2』くろしお出版 pp.16-27.
- 細川英雄(2003).「個の文化」再論 日本語教育における言語文化教育の意味と課題「21世紀の『日本事情』」編集委員会『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ 5』くろしお出版 pp.36-51.
- Beebe S. A., Beebe S. J. & Redmond M. V. (1996). *Interpersonal Communication: Relating to Others*. MA: Allyn & Bacon, pp.258-292.
- Goodman N. R. (1994) . *Intercultural Education at the University level. Improving Intercultural Interactions*. CA: Sage Publications, Inc., pp.127-147.

